

「歴史」と「境界」という視点に立つ アジアの女性美術家の研究

京都造形芸術大学 通信教育学部 博物館学芸員課程 非常勤講師

小勝 禮子

(お問い合わせ先) 京都造形芸術大学科研費担当 TEL: 075-791-9125 E-MAIL: kaken@office.kyoto-art.ac.jp



研究の背景

私は1984年から2016年まで栃木県立美術館に学芸員として在籍し、その間、「揺れる女/揺らぐイメージ フェミニズムの誕生から現在まで」(1997年)を皮切りに、美術史の中で忘却されてきた女性美術家の作品を調査し、可視化する展覧会を開催してきました。特に「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち1984-2012」展(2012-13年、図1)では、それまでヨーロッパや日本に限られていた調査対象をアジア(注)に拡大して、福岡アジア美術館が蓄積してきたコレクションやアジア諸国・地域の美術家との交流を足掛かりにして、16か国・地域の50人の女性美術家の作品を出品し、国内の4つの美術館を巡回しました(福岡アジア美術館、沖縄県立博物館・美術館、栃木県立美術館、三重県立美術館)。

しかし、この時は展示空間や予算の制約もあり、新たに調査したインド、ベトナム、中国、台湾などの女性美術家の興味深い作品をすべて出品するには至らなかったのが残念でした。2016年3月に美術館を退職、「今後は展示を目的にするのではなく、研究対象として、もう一度アジアの女性美術家の現在までのさまざまな活動を調査したい」と考えました。さらに、これまでのデータと併せて総覧し、誰でもアクセスできるようなデータベースを作成・公開することで、アジアの女性美術家の存在とその表現の多様性・可能性を世界的に発信していくことを目指して科研費に応募し、幸いに採択されました。

研究の成果

1年目の2017年度には、研究体制の構築とネットワーク形成、および基本文献の収集に着手しました。連携研究をお願いした北原恵氏(大阪大学教授)、金恵信氏(沖縄県立芸術大学准教授)のほか、アメリカ在住のアジア・日本美術研究者や、韓国、台湾の美術家や研究者、フランスやドイツ在住のアジア、日本人美術家など、協力体制のネットワークをグローバルに広げていくこと

も、これまでの交流の蓄積から比較的容易に進めることができました。

特に私が連携研究者とともに昨年初めて調査したインドネシアのジョグジャカルタとジャカルタ(図2)では、ビエンナーレ開催期間に合わせたので、同国内はもとよりそれ以外の国の主要な女性美術家やキュレーター(香港、オーストラリア、ブラジルなど)も集まっており、調査研究を次の段階に進める足掛かりを得ることができました。インターネット時代とはいえ、やはり現地に足を運んで実際に会って直接対話し、作品を調査することは、美術史・美術批評の調査研究にとっては欠かすことができません。そのための旅費や滞在費、参考資料費として科研費を使うことができたのはありがたく有意義でした。

その他、福岡アジア美術館会議室を会場として、大学院生ら若手研究者によるアジア女性美術家に関する研究報告会も開催し、次世代のアジア美術研究を振興する機会も提供することができました。

今後の展望

今後は、引き続きアジアの他の諸国の女性美術家の調査を続け、この研究の目的であるアジア女性美術家のデータベースをどのような形で構築できるか、インターネット関係の専門家の助言も参考にしながら3年目までに形にしたいと考えています。その際に、「境界」というキーワードを使った研究論文も公開し、民族、国境、宗教、ジェンダーなどさまざまな領域の境界を見つめ直すことで、社会との密接な関わりが少ないように見える日本の現代美術家や美術愛好者にも、今後より幅広い美術の社会的役割に視野を広げていけるのではないかと考えています。

注：ここでいうアジアとは、福岡アジア美術館の収集対象地域にならって、西はパキスタンから東は日本まで。オーストラリアや中央アジア、中東地域などは含まない。



図1 「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち1984-2012」展図録の表紙
図版の作品はユン・ソクナム(韓国)《ピンク・ルーム5》1995-2012年

関連する科研費

2017-2019年度 基盤研究(C)「東アジアの女性アーティストに見る地域と歴史の境界をめぐる研究」



図2 ジャカルタ・ビエンナーレ開会式。中央が同展ディレクターで、パフォーマンス・アーティストのメラティ・スルヨダルモ氏。